

うず 埋もれた十字架

— 天正遣欧使節と黄金の十字架 —

小 西 瑞 恵

要旨

大阪中津にある南蛮文化館（北村芳郎館長）には、美しい黄金の十字架が保存されている。この十字架は、北村芳郎館長の解説によると、1951年に長崎県南有馬町（南島原市）の原城本丸跡から発見されたが、実は天正の遣欧少年使節がローマ教皇から託されて日本に持ち帰り、キリシタン大名有馬晴信（プロタジオ）に贈ったものであるという。この黄金の十字架について、最初に、これまで不明であった十字架発見の状況（発見者や発見場所）を初めて明らかにした。次に、文献史料（原文はイタリア語）により、これは十字架の形をした聖遺物入れであり、有馬晴信の遺品であることを確認した。天正遣欧使節については、織田信長が狩野永徳に描かせて託したローマ教皇への贈物（安土城の屏風絵）が探し求められているが、この十字架は使節が日本に持ち帰った教皇からの贈物である。なぜ島原の乱の舞台となった原城跡に、有馬晴信の遺品が埋もれていたかという問題については、同じく晴信の遺品である山梨県甲州市大和町栖雲寺蔵「伝虚空蔵菩薩画像」（最近、泉武夫氏により元末14世紀の景教聖像であることが実証された）について述べ、キリシタン大名として刑死した晴信の側近くにいた者が、島原の乱の際に原城跡で殉教したのであろうと推論した。

はじめに

大阪中津にある南蛮文化館には、優美な装飾をともなった黄金の十字架（22金）が保存されている（写真1）。この十字架は南蛮文化館開設以来の所蔵品であるが、一般にはまだ広く知られることもなく、現在に至っている¹。北村芳郎館長の解説が、この十字架の由来と歴史を語ってくれる²。1951年（昭和26）2月に原城本丸跡（長崎県南島原市南有馬町）から「南有馬の一農婦によって発掘されるまで三百年以上の長い間地中に人知れず埋没していた」この「黄金の十字架」（縦4.8、横3.2cm）は、「金線を縊り合わせて造られていて下部が球型になった箆状筒型で、その形状からキリストの磔刑に用いられた聖木十字架の一片がこの中に納められていたものと云われる」。1582年（天正10）日本を出発した伊東マンショらの遣欧少年使節は、フィリップ二世やローマ教皇（グレゴリオ十三世と次のシスト五世）に拝謁して1590年

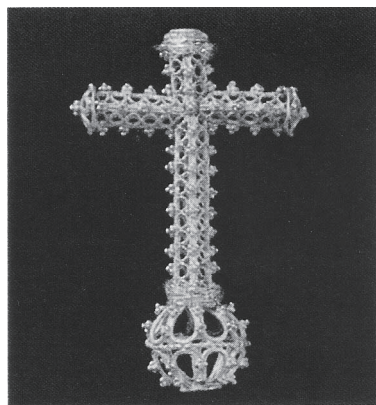


写真1 黄金の十字架（原城址より発掘）

(天正18) 帰国した。有馬の聖堂で教皇からキリシタン大名有馬晴信(プロタジオ)に賜った品々の授与式が行われた際、巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノから聖十字架が晴信の胸に懸けられたが、まさにその十字架であろうという(人名の表記は、原文のまま)。

結論から先にいえば、この北村芳郎説について、私も賛成するものである。以下の叙述においても、「黄金の十字架」という通称で呼ぶことにしたいが、これは普通の十字架ではない。本来は下部の籠状の部分に聖木を取めたのであり、胸に懸けるために造られたものとはいえないが、後述する史料では、有馬の聖堂における儀式で、最初は祭壇に飾られていて、次には鎖を付けて有馬晴信の胸に懸けられている³。

十字架の由来についての北村説は明らかであると思うが、一方では謎も多く残されている。黄金の十字架が発見された際の状況や、なぜこの十字架が島原の乱の舞台となった原城跡に埋もれていたのかについて、これまで明らかにされていないからである。近年原城跡については本格的な学術調査も継続して実施されている。発掘調査の成果などともあわせて、これらの問題を検討し、歴史の真相に迫ってみたいと考える。

一 黄金の十字架の発見

1998年10月に南有馬町で、島原の乱・原城落城360年のシンポジウム「原城発掘」が開催されたとき(一日目は台風来襲のため中止)、これに合わせて原城文化センターで特別展が開かれ、黄金の十字架も一日だけ公開された⁴。この十字架が南蛮文化館を離れたのは、開設以来初めてで、南有馬町に里帰りのものもこの時一度きりである。行き帰りは、パトカーに大切に乘せられての行程であったという。

私は2005年10月中旬に島原半島の南西部に位置する南有馬町を訪れ、十字架が発見されたときの聞き取り調査をおこなった。その結果、南有馬町教育委員会の松本慎二氏のご協力によって、発見者の氏名を明らかにすることができた。発見者は、小淵かづさんと、すでに死去されているが、長男小淵英哉氏が北九州市に、甥の小淵三男氏が南有馬町に在住している。とくに発見当時小淵かづさんの近くにいた小淵三男氏から、詳細な話を聞くことができた。発見したのは、原城本丸跡の小淵家の段々畑であったという。発見場所も、今回はじめて確定されたので、図示するところである(写真2)。

発見された当時は、大きなニュースになったと思われるが、当時の記録は入手できなかった。地元のラジオ局で放送された時も、ご本人の代わりに夫清久氏が出演したという。発見後、長崎市の博物館に寄託されていたが、その後小淵家にもどり、必要があって(葉代のために)中学校の理科の先生に売却され、その先生から南蛮文化館の開設を控えた北村芳郎夫妻の手に渡った。先生の交渉先には、東京国立博物館や神戸市立博物館もあったという。この十字架を見せられた北村夫妻は、即座に入手する決意をされたという。当初から、この十字架を南蛮文化館のシンボルにしたいと考えていたと、直接にうかがった。

黄金の十字架 発掘現場



写真2 原城跡本丸空撮

すでに述べたように、この黄金の十字架は、天正遣欧使節がローマ教皇から託されて日本に持ち帰り、キリシタン大名の有馬晴信に贈ったものであるという。天正遣欧使節とは、1582年（天正10）に九州の三人のキリシタン大名がローマに送った四人の少年使節である。彼らが出発した時の年齢が13歳くらいだったことから、少年使節といわれている。ただし、当時の日本では、15・16歳くらいが成人とされ、成人儀式（元服・加冠）を12～15・16歳に行っていたので、現代から思うほど（年端もいかない少年を、というほど）幼い訳ではなく、非常識でもない。むしろ、長年限を要する旅行期間と日本とは全く別世界への旅立ちであることを考えれば、成長途上にある純真無垢な少年たちを使節に選んだ派遣者の意図は、容易に理解できるであろう。

この天正遣欧使節を発案したのは、イエズス会巡察師ヴァリニャーノで、彼の強い指導力によってこの大事業が推進、実行されたとされる。豊後の大友義鎮（宗麟）・肥前の有馬晴信・大村純忠の三キリシタン大名が、これに応じて教皇に四少年からなる使節を派遣したのである。ヴァリニャーノ自身は、インドのゴアに拠点を置いて活躍していたが、日本からインド・ローマへの帰還にあたり、急遽日本人キリシタンのローマ派遣を計画したものだという。そして、有馬のセミナリオ（神学校）に学んでいた少年四名、正使に伊東マンショと千々石ミゲル、副使に原マルチノと中浦ジュリアンが選ばれて1582年（天正10）2月長崎を出帆し、ゴア・リスボン・マドリード・フィレンツェを経て1585年2月にローマ入りし、教皇グレゴリウス13世に拝謁した。グレゴリウス13世は現在の「グレゴリオ暦」を採用したことで著名な教皇である。教皇の死で使節はその葬儀に参列し、のち新教皇シクストゥス5世にも拝謁して、その戴冠式にも参列した⁵。四使節は所期の目的を達し印刷機を持参して90年7月長崎に帰着し、翌年インド副王使節の肩書のヴァリニャーノに同行して聚楽第で豊臣秀吉に拝謁した。彼らは同年イエズス会に入り、のち退会した千々石ミゲル以外の三人はともに司祭に叙階された。

16世紀の天正遣欧使節



第1図
(伊東マンショ和服の肖像画か)

ところで、2005年11月17日の朝日新聞夕刊によると、織田信長の命で描かれ、天正遣欧使節などの手を経て、ローマ教皇グレゴリウス13世に献上されたという「安土城之図」（狩野永徳筆の屏風絵）を探しに、滋賀県安土町の津村孝司町長がローマにでかけ、現教皇（法王）のベネディクト16世に謁見した。安土城は1579年に琵琶湖を望む安土山に完成した。5層7階の天主（天守閣）を誇ったが、1582年（天正10）6月2日の本能寺の変のあと、築城から3年で炎上した。この屏風絵が見つければ、焼失した安土城の全容を知ることができるため、たいへん大きな成果になるが、結果的には未発見のまま終わった。しかし、これとは別に、遣欧使節の代表伊東マンショの可能性の高い肖像画と、少年使節の教育係だったメスキータ神父と思われる肖像画2枚を、グレゴリウス13世の子孫が所有していることがわかったという（11月29日の朝日新聞、第1図）。保管していたのはローマ在住のパオロ・フランチェスコ・ボンコンパーニ・ルドビジ侯爵で、グレゴリウス13世（在位1572～85）が聖職者になる前にもうけ

た息子の子孫であり、邸宅の古い本にはさまっていたという。

「マンティオ師 ブンゴの王の使節
ローマ法王グレゴリウス13世、
1585年」などと書かれた、えり付きの服の上に和服を着た少年が、豊後のキリシタン大名だった大友宗麟の名代だったマンショとみられる。右に揚げた四人の少年使節とメスキータ修道士の肖像画は、京都大学付属図書館蔵の1586年のドイツの新聞に載ったものである(第2図)。実は少年使節とメスキータ師の肖像画のうち、もっとも信憑性が高いのは、ミラノで彼らに会い描写したウルバーノ・モンテのスケッチで、これらは現今、ミラノのアンプロシアーナ図書館の古記録のなかに含まれる⁶。



以上述べたように、現在は天正遣欧使節がローマに持参した安土城の屏風絵が話題になっているが、ここで取り上げているのは、少年使節が日本にもたらした黄金の十字架である。彼らが長崎に帰ってきたのは、1590年7月であった。彼らのために有馬の聖堂で開催された歓迎式の記録が、ダニエルロ・バルトリ編の『耶蘇会史』(『大日本史料 第十一編別巻 天正遣欧使節関係史料』)にあるので、以下に引用する。この8年半の間に、大友宗麟と大村純忠は亡くなり、有馬晴信だけが存命であった。大村喜前は大村純忠の嫡子である。

よしあき
I 「使節等有馬晴信、大村喜前ニ謁シ、教皇ヨリノ賜物ヲ呈ス」

「賜物は祭壇の上側の、美麗に覆われたる卓上に置かれたり、銀の鞘に黄金の飾を施したる劍一振と、悉く宝石にて飾りたる帽子一箇なり、祭壇の上には、金象眼を施し、十字架の形をなしたる聖匣に、キリストの十字架の聖木の一片を納めたるを置きたり、ヴァリニャニは、教皇シスト五世より当地のパードレ等に賜はりたる金欄のピヴィアレに着替へ、祭壇に昇る階段の上に坐し、祭儀に與る人々はその両翼に二列に連りたり、」

II 「この時四人の青年使節等ヨーロッパの服を着け、宛も今到着したるかの如く、姿を現したり、(中略)使節等は賜物を載せたる卓子の方に進み、ドン・ミゲルは抜放ちたる劍を執り、ドン・マルチノは鞘を手にし、ドン・マンショは帽子を、ドン・ジュリヤンは開きたる書翰を持ちてヴァリニャニの側に立ちたり、しかして王はその足下に跪きたり、ヴァリニャニは、執事が祭壇の上よりとりたる、十字架の聖木を納めし聖匣を、その手より受取り、これを王に示し、その頭上に載せ、次いでこれに接吻せしめ、美しき黄金の鎖を以てその頸に懸けたり、次に劍を

交付せしが、王は信仰擁護のためにこれを用ひんと欲する證として、少しくこれを振りたり、最後に帽子を頭に載せ、先づ三種の賜物の総てに対し、次にその各に対して、ローマの儀礼書よりとりたる祈祷の言葉を述べたり、」（下線部は筆者）

ヨーロッパ式に叙述されているが、ここにみえる王が有馬晴信である。ドン・ミゲルは千々石ミゲル、ドン・マルチノは原マルチノ、ドン・ジュリアンは中浦ジュリアン、ドン・マンショが伊東マンショである。この日本文には、イタリア語の原文が付けられている。イタリア語に堪能な知人に教示を求めたところ⁷、Ⅰの下線部は「祭壇の上には、七宝を施した黄金の貴重な聖遺物入れ（それは同時に十字架でもある）に収めた、キリストの十字架の聖なる木片があった。」であり、Ⅱの下線部は「助祭はそれら（の贈り物）を手に取り、祭壇の上に運んだ。彼はまず木片を収めた聖遺物入れを親愛なる王に示してから、つぎにそれを頭上に置き、彼に接吻させ、そして持っていた美しい黄金の鎖とともに彼の頸にかけた。」という訳文になった。ちなみに、大日本史料の翻訳は、たいへん見事なものであるという。「聖匣」という表現のためか、南蛮文化館の黄金の十字架とは別物であるという解釈も聞くが、以上の訳文からも明らかなように、有馬晴信に贈られたのは、黄金の貴重な聖遺物入れ（それは同時に十字架でもある）であり、鎖を付ければ頸に懸けられる黄金の十字架でもあったことになる。

結論として、この十字架の形をした聖遺物入れ（reliquiario）は、南蛮文化館所蔵の黄金の十字架にまちがいないと考える。それでは次に、この十字架がなぜ原城本丸跡から発見されたのかという問題について、その後の有馬晴信と黄金の十字架の運命をたどっていきたい。

二 栖雲寺蔵「伝虚空蔵菩薩画像」と有馬晴信

有馬晴信と黄金の十字架については、もう一点、まことに珍しい画像が、山梨県の旧東山梨郡大和村天目山栖雲寺に保存されている。当地は2005年11月に勝沼町・塩山市と合併して甲州市大和町となったが、1982年（昭和57）に大和村の有形文化財に指定された「伝虚空蔵菩薩画像」（絹本着色一幅 縦153.3、横58.7cm）がそれである（写真3）。画像の胸部に黄金の十字架が描写されているところから、有馬晴信の遺品、あるいは肖像画と言い伝えられてきた⁸。なぜ九州を遠く離れた当地に、有馬晴信に関わる画像が伝存されてきたのかについては、次に述べる通りである。

有馬晴信は肥前国有馬（長崎県島原半島高来郡）の領主であり、日野江城（南島原市北有馬町）の城主であった。原城（南有馬町）は後に（1599～1604年⁹）築かれた城で、有明海の島原湾と橘湾に三方を囲まれた断崖上に築かれ、橘湾側の西方だけがややなだらかに降る地形である。ここに1562年（永禄5）口之津（南島原市口之津町）を開港したのは晴信の父義貞（もと義直）である。1563年（永禄6）、義貞の弟で大村家を嗣いだ純忠が、日本最初のキリシタン大名になった（ドン・バルトロメウ）。義貞は大村純忠を通じてイエズス会に宣教師の派遣を請うたため、同年ルイス・アルメイダが島原から口之津に入り、約半年伝道し、250名に洗礼を受けた。1576年（天正4）、義貞は口之津でガスパル・コェリヨから洗礼を受けドン・アンドレの名を与えられ、夫人もこれに

続いたが、同年義貞は死去した。晴信は義貞の次男で、兄義純の死により1571年（元亀2）家督を嗣いだぐ、後見役であった父の死後も、仏教に固執して入信せず、キリシタンを迫害していた。1579年（天正7）、イエズス会巡察使アレキサンドロ・ヴァリニャーノが、日本での布教を視察・指導するため中国マカオから定期船で口之津に上陸し、当地の教会で日本在住の宣教師会議を開いた。晴信がヴァリニャーノや叔父大村純忠に強く勧められて入信したのは、翌1580年3月である。当時晴信は竜造寺隆信の脅威にさらされていたため、イエズス会から多くの食糧・武器・弾薬の援助を受ける必要があったからだとされる。ヴァリニャーノが洗礼を施して、ドン・プロタジオの名が与えられた¹⁰。以後の敬虔なキリシタン大名としての晴信については、天正遣欧使節の派遣やイエズス会への浦上の所領寄進などが証明している。

藩主としての有馬晴信は、秀吉の九州平定後、文禄慶長の役にも出陣し軍功をたてた。1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いでは、東軍（徳川家康）側に属して生き残り、朱印船貿易も許可され、東南アジアに雄飛したが、1608年（慶長13）家康の命で伽羅香木購入のためチャンパ（占城、現ヴェトナム領）に派遣された晴信の船がマカオに寄港し越年した際、乗組員とポルトガル人とのあいだに騒乱が起き、晴信の家臣5人が殺された。この報復のため、晴信は1609年（慶長14）長崎に入港したポルトガル船を爆沈し、幕府に忠節を示している。しかし、1612（慶長17）年に、岡本大八事件¹¹という奸計に陥って、身を滅ぼした。岡本大八は家康の側近本多正純の与力で、キリシタン（洗礼名パウロ）であったが、有馬晴信に恩賞を斡旋すると持ちかけて多額の金品を詐取したという事件である。いわば晴信は詐欺にあった被害者であり、岡本大八を訴え出たが、取り調べのなかで、多額の金品を贈ったことが問題とされて贈収賄事件となり、元は長崎奉行長谷川藤広の部下であった岡本大八に長崎奉行暗殺を企てたと陥れられたのである。結局、晴信は領地を追われ、大和村丸林に謫居の身となり、同年5月6日死を命ぜられたが、自刃せず家臣の手で刑死した。しかし、有馬家は廃絶しなかった。嫡子直純の妻は、徳川家康が寵愛して養女とした曾孫国姫であったゆえである¹²。

次に問題としたいのは、栖霞寺蔵「伝虚空蔵菩薩画像」の歴史的評価と位置付けである。美術史家家泉武夫氏による「景教聖像の可能性—栖霞寺蔵伝虚空蔵画像について—」という最新の論文を紹介したい¹³。

泉氏はこの作品の形式・表現法がまさしく仏画そのものに他ならないことを詳しく分析したうえで、尊像の持物である華台上十字型は仏教には類例のない形をもち、もちろん虚空蔵菩薩のいかなる図像にもあてはまらないため、仏教以外の類例を求めざるをえないことになるが、それは景教関係の遺品中に見られる十字架型であるとする。「唐時代に中国に伝わったネストリウス派キリスト教は、エフェソスの公会議で異端とされ追放された。しかしペルシアを経由して唐に伝えられ、景教として認知された。武宗の仏教禁圧の折にそのあおりで大分衰えたが、かろうじて元時代末まで命脈を保っていたとされる。」と論じて、佐伯好郎著『景教の研究』を参照している¹⁴。また、近年の中国側の研究でも揚州や泉州出土の景教碑が紹介され、元時代の江南における流布の状況が明らかにされつつあるという。

写真3

伝虚空藏菩薩像

(景教聖像)



黄金の十字架 発掘現場

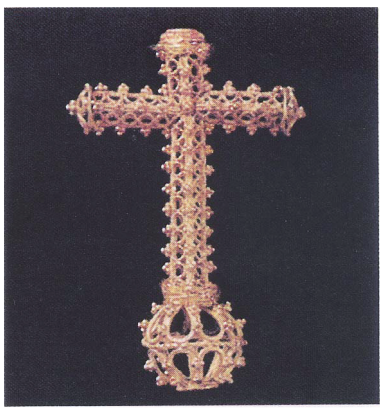
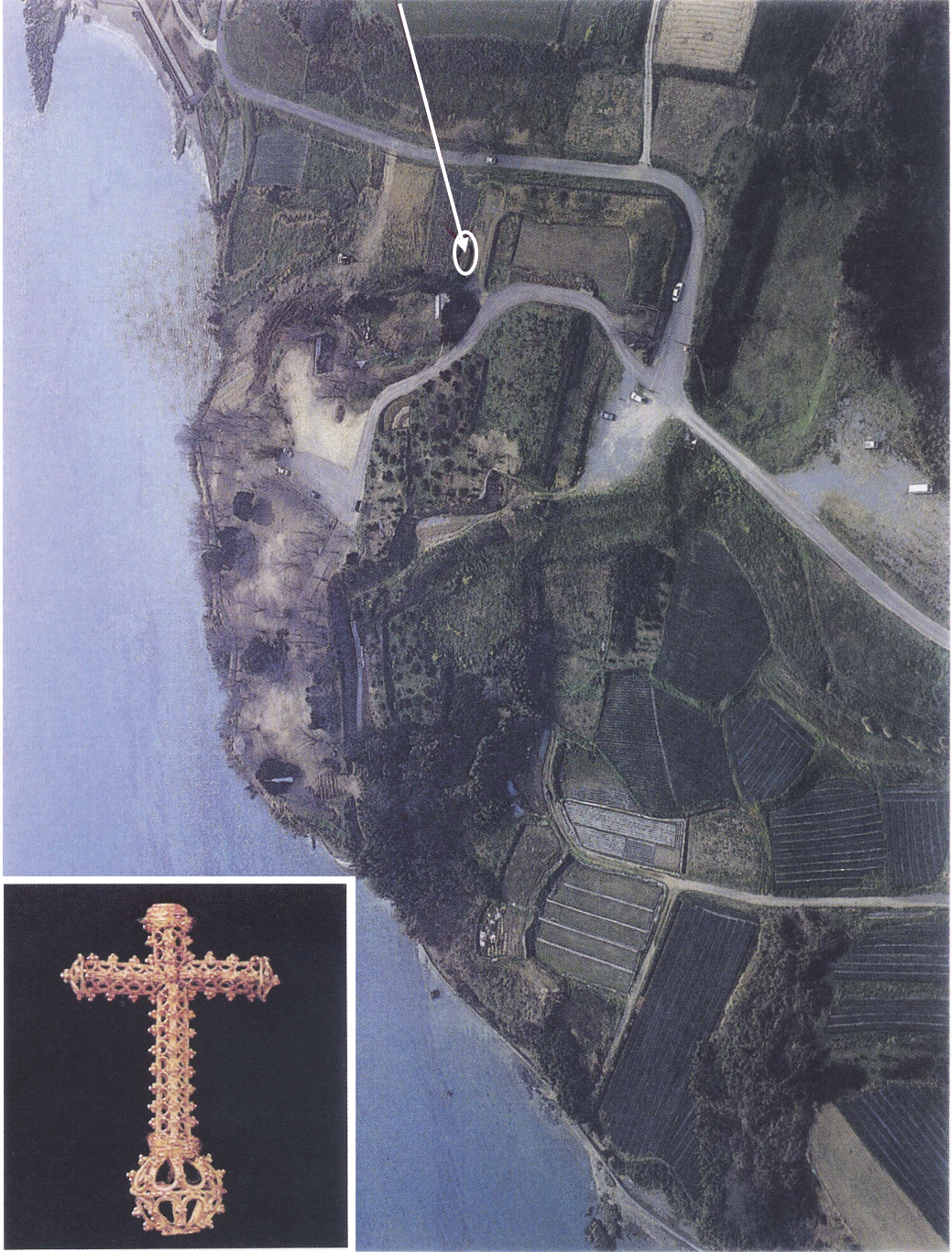


写真1 黄金の十字架 (原城址より発掘)

写真2 原城跡本丸空撮

写真3

伝虚空藏菩薩像

(景教聖像)



佐伯好郎著『景教の研究』には、石碑・墓石などに残された多数の十字架型が収録されているが、これを享けた江上波夫氏はアジアの景教関係遺物ことに墓石を含む石彫品にみられる「十字架図紋」を整理して、大きく中国式と西方式の二種に分類している。中国式の特色は蓮弁・蓮台があることで、西方式の特色は宝玉飾があることだという。蓮華を思わせる華台上に十字架を安置するのは、すでに唐の「大秦景教流行中国碑」(781年)からはじまっており、中国式が仏教美術の構想を借用したことは疑いないという。泉氏が本作品との比較で重要視するのは、泉州水陸寺内墓石の十字架型と泉州発見の十字石である。前者は、華台上に剣先型の十字架を置いている点で類似し、後者は剣先型十字架の別の類例であるとともに、その下の有翼天使の持物がまた華台上十字架である点で、きわめて近いものがあるという。さまざまな事例を踏まえ、本作品の尊像の持物は中国風にアレンジされた十字架であり、本画像は景教の聖像を描いたものと考えざるをえないというのが、泉氏の結論である。

泉氏の論証は、ほかにも大和文華館本六道絵との関連や栖雲寺本の尊格についてなど多岐にわたるが、この画像が元代末の14世紀に中国で作成されたものであり、有馬晴信の遺品として栖雲寺に伝存されたものであること、ほぼ完全なかたちで伝わる景教本尊像としては現存唯一と目される作品であるという結論がもっとも重要であると考えられる。泉氏の実証によって、この画像が有馬晴信の肖像画ではないこと、したがって、画像に描かれた黄金の十字架が、ローマ教皇から託されて天正の遣欧使節が日本に持ち帰った黄金の十字架とは別のものであることは、ほぼ明らかになった¹⁵。しかし、泉武夫氏も栖雲寺蔵の景教尊像は有馬晴信の遺品であるとしている。入手時期についても検討している¹⁶が、私はさらに大村氏がイエズス会に所領を寄進したため、当時日本で唯一のキリスト教会領都市として国際貿易上繁栄していた長崎や有馬領口之津が果たした役割の大きさを付け加えておきたい。中国における景教は明時代には徹底的に弾圧されて姿を消したというのが定説であるが、すでに参照したように、江南地方を中心に元末まで景教徒が存在していたとすれば、景教の作品が秘かに伝存されていても不思議ではない。マカオを重要な基地として16世紀後半に布教したイエズス会宣教師やアジアで広く活躍した貿易商人らを通じて、この作品は日本にもたらされ、有馬晴信の手に入ったと推測される。晴信自身がこの画像の歴史的・宗教的意味をどこまで正確に理解していたかは分からないが、黄金の十字架が描かれているところから、ローマ教皇から贈られた黄金の十字架(聖遺物入れ)と同様、貴重な宝物として秘蔵したことであろう。晴信没後、画像の由来は忘れられていったと思われる。箱蓋の表には「虚空蔵幅 天目山宝物」と墨書されているが、江戸時代にキリスト教が厳禁されたことから、長年開かずの箱として栖雲寺に保存され、戦後になってようやく陽の目をみることになった。本画像の美術史的重要性は無論のこと、歴史的な重要性は計り知れないと考える。

三 鳥原の乱と黄金の十字架 — 終わりに —

藩主有馬直純が鳥原を去って20年後、大規模なキリスト教徒の反乱が原城跡を舞台に起こった。史上有名な鳥原の乱、天草の乱である¹⁷。この乱の「キリシタン陣中旗」が、原城からの分捕品として鍋島大膳家に伝わって残っている¹⁸(重要文化財)。長崎県南島原市南有馬町の原城跡で

は、1994年から毎年発掘調査が実施され、大量のキリシタン関係遺物が出土している。それは、主として十字架やメダイ（ポルトガル語でメダルのこと）、ロザリオ（同、ローマ教会の数珠のこと）の珠である。そのほかに、多量に出土したのは陶磁器類である。中国、朝鮮、東南アジア、日本各地からと広範囲におよび、そのうち主要なものは中国製である¹⁹。

この十字架のなかで一番多いのは、鉛製の十字架で、島原の乱の時に籠城中の一揆軍が、火縄銃の玉を溶かして作ったと考えられている。また、縦が約7cmで、本体は箱形で表裏面に受難の道具の図柄が描かれている青銅の十字架も出土した。メダイは全て青銅製で、ロザリオの珠は青・緑・白などの色のガラス製である。このような遺物の一部は、南有馬町原城文化センターに展示されているので、直接見るができる。

最後に、どうして原城本丸跡からこの黄金の十字架が発見されたのかという最大の疑問にもって考えてみよう。この黄金の十字架は、ローマ教皇から有馬晴信に贈られたものであった。有馬晴信には敬虔なキリシタン大名としての顔とは別に、藩主として政治家としての顔があり、彼がどこまでキリスト教を信仰し続けたかは明確ではないが、嫡子直純を1586年（天正14）に産んだ妻（大村純忠女、ルチアか）が逝去した後、再び迎えた妻²⁰が、1599年（慶長4）ヴァリニャーノから有馬で洗札を受けたといわれるので、1612年に死去するまで信仰を棄てていなかったと思われる。岡本大八に陥れられ、甲斐に配流された時、側近の家臣十数人と妻ジュスタが付き添ったという。配流先では、妻ジュスタと共に神に祈る毎日であったと思われる。有馬晴信が死んでから、おそらく妻ジュスタは晴信の遺品を携えて、島原の地に帰ったことと思われる。あるいは、家臣の誰かが遺品の黄金の十字架を、有馬に持ち帰ったのかもしれない。それからほぼ四半世紀後、島原の乱が起こった時、ジュスタか、家臣か、あるいは、この十字架を秘かに伝えられた当地のキリスト教徒の誰かが、島原の乱で殉教したのであろうと、今は想像するしかない。ちなみにこの十字架が発見された場所付近からは、陶磁器類は発掘されたが、遺骨は出ていないそうである。

天正遣欧使節が日本に帰国した1590年から数えれば、今年は416年になる。400年以上も前に、ローマから海を渡って日本にもたらされ、栄光と悲運の生涯を送ったキリシタン大名有馬晴信の身近にあり、その後島原の乱で三万人近い人々が死を迎えた原城跡に長く埋もれるという数奇な運命をたどった黄金の十字架は、今なお謎を秘めたまま、16世紀から17世紀における歴史の真実を私たちに語りかけている。

* 本稿は、2005年12月17日に大阪樟蔭女子大学公開講座（日本文化史学科主催）として開催した「埋もれた十字架—天正遣欧使節と黄金の十字架—」の原稿をもとに、その後の新しい知見を加えてまとめたものである。山梨県甲州市大和町栖雲寺蔵「伝虚空蔵菩薩画像」については、泉武夫氏の論文にもとづき、景教聖像であることを書き加えたが、基本的な論旨は変わっていない。南蛮文化館蔵黄金の十字架と栖雲寺蔵景教聖像のいずれも稀有の文化財であり、ともに有馬晴信の遺品として現代に伝わる奇跡を思うとまことに感慨深く、その歴史的重要性について改めて強調しておきたい。

註

- ¹ 松田毅一著『南蛮巡礼』（朝日新聞社、1967年）口絵の白黒写真で紹介された以外は、ほとんど取り上げられていない。
- ² 北村芳郎解説『南蛮美術 I』（南蛮文化館、1968年）
- ³ 「使節等有馬晴信、大村喜前ニ謁シ、教皇ヨリノ賜物ヲ呈ス」（ダニエルロ・バルトリ編耶蘇会史、『大日本史料 別編天正遣欧使節関係史料』所収）
- ⁴ このシンポジウムについては、石井進・服部英雄編『原城発掘』（新人物往来社、2000年）を参照されたい。
- ⁵ 遣使の目的は、教皇に東洋の新しいキリスト教徒を披露し、使節にキリスト教世界の現状と偉容、キリスト教諸王侯の広大尊貴さと権威、壮大豪華な諸建造物などを見聞させ、使節を通じて日本人に知らせ布教活動の一助とするため、またイエズス会の日本布教における実績をローマ教会とヨーロッパ世界に強く印象づけ、これによって教皇から日本布教に対する物心両面の援助を得ようとするためであった（五野井 隆史「天正遣欧使節」、『世界大百科事典』）。
- ⁶ 『週間朝日百科 日本の歴史 25 キリシタンと南蛮文化』参照。
- ⁷ 大阪市立大学文学部教授ピエール・ラヴェル氏による。厳密には、ラヴェル氏がイタリア語をフランス語訳したものを、同大学名誉教授小西嘉幸が日本語訳した。なお、若桑みどり著『クアトロ・ラガッツィー 天正少年使節と世界帝国一』（集英社、2003年）では、この黄金の十字架について、「その日、祭壇の上には、七宝で飾った金の十字架のなかに納められている聖十字架の木片が飾られ、四人の使節は教皇からもらった美しい衣服を着けて並んだ。」「ヴァリニャーノは（中略）聖十字架と帽子と剣を晴信に架けていった。」（同 483 頁）と記している。
- ⁸ 大和村教育委員会編『大和村の文化財』（大和村役場、2003年）
- ⁹ 千田嘉博「城郭史上の原城」（『原城発掘』所収）参照。
- ¹⁰ 野村義文著『キリシタン大名有馬晴信』（新波書房、1982年）、吉永正春著『九州のキリシタン大名』（海鳥社、2004年）参照。
- ¹¹ 1612年大八は下獄し晴信の長崎奉行長谷川左兵衛謀殺の企てを訴えて対決した。結局、晴信は改易・甲州配流後に死を賜り、大八は駿府阿倍河原で火刑に処せられた。家康はこの事件を契機にしてキリスト教に対する禁圧の姿勢を明確にし、駿府、江戸、京都に禁教令を発令した。駿府家臣団のキリシタン検索を実施して直臣と侍女十数名を摘発・追放し、この旨を諸大名に通達した。これは単なる贈収賄事件にとどまらず、封建的主従関係の根幹である所領問題が取引の対象とされ、將軍の代理人ともいふべき長崎奉行が西国大名の謀殺の対象となった点で重要な意味を持っていた（五野井 隆史「岡本大八事件」、同上）。
- ¹² 国姫は織田信長の娘徳姫と家康・築山殿の長子信康との間に生まれた娘（次女）と、本多忠政とのあいだに生まれ、初め堀忠俊と結婚したが、夫が家中内紛の不始末で流罪になったため離縁し、駿府城に引き

取られていた。一方、有馬晴信・直純父子は関ヶ原の戦い後大坂に上り、家康から本領島原4万石を安堵され、当時15歳だった直純は家康の側で近習として仕えることになった。晴信のポルトガル船爆沈後、1610年（慶長15）直純は国姫を正室に迎えたが、その際、数子をもうけた妻（小西行長の姪、キリシタン名マルタ）を離縁している。直純は父晴信の死後、島原4万石を受け継いだ。自らキリスト教を棄て、キリシタンを弾圧した。1614年（慶長19）日向延岡藩（宮崎県延岡市）5万3千石の藩主になり、島原の乱では松平信綱に従って功労をたてた。その子康純を経て、清純（もと永純）の時百姓の逃散事件のため、1692年（元禄5）越後糸魚川領主に減封、1695年（元禄8）に越前3郡5万石の丸岡（福井県丸岡町）藩主となり、以後有馬家は丸岡藩主として幕末に至る。

¹³ 『国華』2006年8月号（第1330号）。私は2005年8月、泉武夫・万里夫妻と栖雲寺に調査に赴いた。泉武夫氏の論稿については、『国華』発行前に内容を知ることができた。なお、景教聖像の写真は註8の文献所載のものである。

¹⁴ 東方文化学院東方研究所、1935年。

¹⁵ 甲州市大和町の天目山栖雲寺蔵景教聖像には、未解決の問題が残る。この画像の両肩両膝の位置に、四人の少年らしい画像が認められる。遣欧使節を表わすといわれてきたが、泉氏も「宝冠をつけた人物の顔」については保留したので、更に検討する必要がある。

¹⁶ フロイス『日本史』に、当時中国からキリスト教関係の品がもたらされていた事実が記されていることから、晴信がいずれかの時点でこの作品を入手し、甲斐にもたらしたと考えるのが妥当だろうとする。

¹⁷ 江戸初期の1637-38年（寛永14-15）に肥前島原藩と同国唐津藩の飛地肥後天草の農民が、益田時貞（天草四郎）を首領に、キリシタン信仰を旗印としておこした百姓一揆。領主松倉・寺沢両氏の重税に加えて凶作が相つぎ、10月25日島原半島南部に起こった一揆は翌26日島原城を猛攻した。27日には有明海をはさんだ天草大矢野島（現熊本県上天草市大矢野町）でも蜂起し、島原勢と合流して城代三宅藤兵衛を敗死させ、岡城を囲み（11月19～23日）落城寸前になった。最初九州諸藩は傍観的であったが、事態を重視した幕府は板倉重昌を上使とし、佐賀・久留米・柳河の3藩に出兵を命じた。彼らが島原に到着する12月5日の直前、かなりの村々は領主側に転じたが、島原南部諸村と天草の一部の老幼男女二万数千人は、石垣だけの廃城となっていたといわれる旧領主有馬氏の原城にたてこもり、12月10日以降一揆の第二段階をむかえる。板倉重昌が1638年元旦討死した直後の1月4日に着陣した上使松平信綱は、総勢十数万で十分な陣地構築と兵糧攻めに転じた。城内の結束は固かったが、ついに2月27・28日の総攻撃で全員殺害された。幕府側も死者二千人余、負傷一万人以上を数えた。この後、幕府はポルトガル貿易禁止（1639年）など、鎖国政策を大きく進めた。

¹⁸ 『原色日本の美術 20 南蛮美術と洋風画』（小学館、1970年初版）参照。「天草四郎陣中旗」として熊本県天草市（本渡市）立天草切支丹館に、レプリカが展示されている。

¹⁹ 『原城発掘』や、長崎県南有馬町教育委員会編『原城跡Ⅱ（南有馬町文化財調査報告書 第3集）』、2004年）を参照。

²⁰ 公開講座では、野村義文説などにより内大臣・右大臣菊亭晴季女としたが、渡辺武氏の中山親綱女説もあ

る。彼女は菊亭季持に嫁したが、1596年夫が病死したため、1599年小西行長の媒酌で晴信と再婚し、二男二女に恵まれた。しかし、晴信の死後息子二人は直純の命で殺されたという（「キリシタン大名有馬晴信の生涯」、1984年）。一方、森山恒雄氏は、晴信女について、「菊亭季持の室のち離婚」とする（『藩史大事典 第7巻 九州編』所収「日之江藩」、雄山閣、1988年）。